

中国男性の家事参加の実態と意識 ——重慶在住の既婚男性を例にして——

孫海翔（神戸大学）

一、問題設定

2020 年中国第四期中国婦女社会地位調査によれば、「男は仕事・女は家庭」に賛同しない割合が増加傾向にある反面、共働き家庭における男性の家事参加が依然として不足していることが分かった。家事分担の平等化推進に男性の家事参加が欠かせないものの、中国における家事分担に関連する既存研究は女性の考察に重心を置くものが多く、男性に注目した研究は極めて不足している。わずかの先行研究でも家事参加時間に注目した量的調査がほとんどである。その上、中国では大きな地域差が考えられるが、上述した全国調査のような包括的な研究がある一方で、男性の家事参加にフォーカスして行われた地域調査も数少ない。

したがって、本研究では「仕事と家庭を両立させている男性が多い」と言われる中国重慶市に注目し、重慶に在住する既婚男性の家事参加の実態とそれにまつわる意識を考察していく。

二、資料と方法

本研究は重慶に在住する既婚男性 14 人とその妻 4 人に個別にインタビュー調査を実施し、男性本人の家事参加の実態と意識にフォーカスして考察を行った。まず既婚男性本人の語りを分析し、家事参加における自身の位置付けをはじめ、具体的な参加状況や不足点など、家事に関する彼らの行動を詳しく考察した。その上で、伝統的な性別役割分業規範と男性の家事能力そのものに対する男性本人の認識を分析し、家事参加にまつわる彼らの意識を考察した。続いて、四組の夫婦の語りを対照させながら、夫婦の家事分担に注目して男性の家事参加をより深く掘り下げた。考察では、「主導と補佐」という評価基準を用いる。「主導」は実際の行動だけでなく、家事の全体像を把握・管理することで、「補佐」は実際の行動にのみ集中し、受動的に動かされることを意味する。

三、分析と考察

分析と考察の結果は以下のようにまとめられる。実際の行動から見ると、男性対象者は、補佐から主導まで皆異なる程度で家事に参加している。家事の「自発性」・「丁寧さ」などにおいて未だ不足が存在し、主導よりも補佐役として家事に参加することが多いが、積極的に家事に参加し、家事を行う頻度が妻と同等またはそれ以上にある場合も確認される。家事参加に関する男性の意識から見ると、硬直化した分業規範から距離を置く対象者が大半を占めている。一方で、男性の稼得役割と女性の育児役割を重視し、「伝統規範」を主張する動きも確認されるが、彼らが認識する「伝統規範」に変化が生じ、男性の家事参加を当然視するようになったという新たな着想を見出せる。しかしそれでも、半数の対象者は依然として「男性の家事能力は低い」という強い葛藤を抱え、男性の家事参加を当然と捉えながら、自身の家事能力に不信感を抱いている。

以上行動と意識の特徴を踏まえて、重慶男性の家事参加は伝統的な性別役割分業規範と異なる様相を呈しているが、家事を当然視しつつも「補佐役」として家事に臨む姿勢そのものは、まだ改善の余地があると言える。それがさらに「自発性」や「丁寧さ」の欠如につながり、男性の家事参加の質を低下させる原因となっていると考えられる。総じて見ると、重慶男性の家事参加は依然として課題を抱えている一方で、グラデーションがあるものの、より多くの男性に当然視されつつあると結論づけられる。しかしその反面、筆者の調査によれば、彼らの育児参加は画一的に不足しており、今後の課題としてさらに検討していきたい。

（キーワード：男性の家事参加、性別役割分業、インタビュー調査）